



戦後65周年企画展

「漫画家たち百二十二名の八月十五日」

8月3日(火) ~ 9月15日(水)

■前期 …8月3日(火) ~ 8月25日(水)

- ・第1章：八月十五日を十六歳以上で迎えた人々
- ・第2章：八月十五日を八歳から  
十五歳で迎えた人々

■後期 …8月26日(木) ~ 9月15日(水)

- ・第3章：八月十五日を五歳から  
七歳で迎えた人々
- ・第4章：八月十五日を四歳より若く迎えた人々



これでスカートがはける

(わたなべ まさこ 17歳 東京)

1945年(昭和20年)8月15日、太平洋戦争は日本のポツダム宣言受諾で終わりました。この戦争で、日本の主な都市二百数十箇所が焼き払われ、多くの尊い人命が失われました。あれから65年、戦争を知らない世代は人口の7割を超えるようになり、豊かな生活のなかで、戦争の貴重な体験や記憶が忘れ去られようとしています。

企画展「漫画家たち百二十二名の八月十五日」は、戦争の時代を生き、戦争のつらさ、悲惨さを肌で感じた漫画家たちが、自らの記憶を風化させることなく、今を生きる私たちに絵と文字と感性で伝える、8月15日の記録です。「私の八月十五日の会」代表である森田拳次さんは、その気持ちを次のように述べています。

「昭和20年8月15日。戦う日本が、平和な日本に生まれ変わったその日、その時、それぞれがどこにいて、何を考え、何をしてきたか。戦禍をくぐって今日まで生き延びた人々の、それぞれのドラマティックな一日を描いた作品は、その一つ一つが平和な世界への道標のような気がする。『私の八月十五日』。一人でも多くの方に見ていただき、戦争について、平和について改めて考えていただければ、幸いだと思う。」

今回は122名による136点と展示作品が多く、展示会場の都合で前期・後期としました。多くの皆様にご覧いただき、漫画家たちが発信するメッセージをしっかりと受け止め、平和について考える道標になることを期待しております。

# あなたに伝えたいこと

石子 順

この画集におさめられた百十余の作品は、三十代から零歳の時に1945年8月15日を体験した漫画家たちが、あの日の、時代が変わった瞬間の空気を、人物を、自然を、事物を、つらさ、悲しさ、痛み、喜び、怒りをこめて描き取っています。もう一度、八月十五日とはどういう日だったのか、あの日に胸にきざんだ思いはそのまま持続しているのだろうか、といったことを思い返し、見つめ、問いかけています。

この画集は、戦争を少しでも体験したことのある世代から、まったく戦争とかかわりあいのない今の世代に、戦争と、八月十五日の事実を伝え、その意味をバトン・タッチしていく大きな一冊となることでしょう。と同時に、この画集は、あの戦争で死んでいった三百十万人の人たちに、生き残ったものたちが捧げる漫画と文とをよじり合わせて作りあげた鎮魂の花環なのです。死者たちは、いつまでもあの日のままで、黙ったまま日本のあり方を見つめています。その死を無にしないために、永遠の平和を築きあげていく礎石の一つとなることを、この画集は願ってやまないのです。



無くした歳月、得た未来

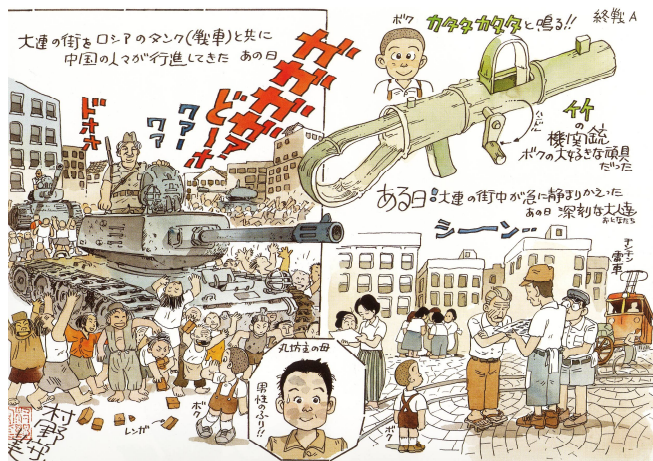
(土田直敏 18歳 学徒動員で熊本)

\*「画集」は、漫画家や作家の団体「私の八月十五日の会」が発行。今回の展示パネルは、その画集の絵と文から、複製編集されている。



新しい時代の予感

(祐天寺三郎 17歳 学生で長野県上田)



男装のお母ちゃま (村野守美 4歳 中国大連)



陽ざし (水野英子 5歳 下関)

その日私は家の前の電柱のそばで、地面に絵を書いて遊んでいました。